次川のうえをやうやくにて
こゝろあわの隣もありやいけ大根　許六
みそさゝい鳴くや小窓乃嫁　翁
月もなを雪をうれてまて　嵐蘭
きえ残る筏のあまりやしさんせさうを
もてはやす
青風やまなの中より松の月　木導

しろよりさむき名乃糸口　翁

正月も空ゝありあわ　貴
もちにたつひや小の内　馬佛
次村

なでしこや人の踏み跡　　許六
わすれ草のもとをきよげに　　李由

夏

二年や紙帳の下に露の玉　　許六
田ごとの井にも落つる菊の水　　李由
傾城のうへゆく雲や雪の峯　　李導
おもふ事ども脩の節々　　朱廸

秋

秋風や吹れうれうと山伏の
声のおもしろさ　　汶村
さし網の苅穂の露や多からん　　朱廸
　　許六
　　李導

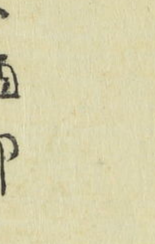
老人　如元　汝村
許六　朱藍　徐寅　李適

許六　李由　汉村　木導　寿

和歌やうのちよ人
雪高まつし
浪人のぬき方
さうし
湯をわき屋の
生花のよ
人すく
雀ちう

六 由
村 導
方 六
由 村
導 寺

元禄七年の冬の
二十日五ツ半ヲ
記事



千川亭

折しこそ伊吹をこえてみ雪

鉄歯亭

本国寺

かくれ家や月をたのまぬ屋根ひとつ　翁

秋の雲

秋の雲杉なき寺の夕哉　本国

文通

何事ぞ朝ゆふ雲のうごくさへ

うらやましくも思ひなしつつ

梅の香や菅丞相の一ぢやう　翁

武陵芭蕉

一歳のうらのこよみをさゝぬ哉

梅柏老

二月七日

春

玉桂ゝ朝ゝをこゝろうう南　如水
弱そろ九一二月をそのまゝさゝゝろ　鉢蘭
えぐりさもの花もれもりさゝゝろ　水葉
もろくをみりあでもの桃のふ　木国
二の月ゝ三ゝきさゝ隣こう郭　ふ川
けろのさかひやゝ茶園ゝの　仝
その信れ岩さそはゝさてゝ　梅甫

大和ゝれ紙ゝさて雪のやまれ雨　三千

夏

松郁子ゝみかりゝこゝ蛍　鉢蘭
簡園ゝてあゝ手や故ゝの月　ふ葉
郁子ゝ
ゝめて
松のゝをゝ清ゝれやゝみなゝ花が　吳井
いつゝ多ゝ雪ゝゆゝしみ月雨　如風

川添やくるをめれと入るれと　仝

　　れのるくる

雲こる水際（ハシ）一家離（ハナ）るゝ雁ゆくゝ　春

あるものをおもてのるもうしおめ

　　四十二字

二就とまむんのくに　月慢る角　鏡

　　雲れを点てる

貧窮をゆるもをきしん歟のをし　如川

旅人やあるあいをしてゆの月　木国

名月やあるゝをもる橋（ハシ）机　文鳥

夕就の墓行春るゝや月　姐風

月やそ柱のすれ忙名ゝ　其水

就のそ高ゝまる月ゝ面　鼠

桂堂の陰をゆゝる扁下ゝ　仝

元禄七年のころより四月
十六日ゆきあり章一一
おのく記まく
連衆十二人

岐阜部

昼讀

[illegible]
[illegible]よろこけてあけ[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]れ[illegible]ころの [illegible] 一水

[illegible]

[illegible]れ[illegible]ころ[illegible]
[illegible]のあるけもの [illegible] 泊帆
[illegible]ありよもすがら [illegible] 白鷺
[illegible]ありけるもの [illegible] 一水
[illegible]なる秋の [illegible] 一雨
[illegible]ころ[illegible]の秋さり [illegible] 已百

[illegible]ころのもの[illegible]に風涼し 仝
風の秋こゝろ[illegible]ころ涼気 蓬雨
下さなをゆるすあり 柏葉 仝
詞ふ
伊丹の屋

[illegible]のまれ[illegible]ぬる[illegible]月夜 似耳

秋

朴木[illegible]もの[illegible]の色 一露

物の木の葉ちるつゝ一ぞよろづ　白机
時雨ある風の月和や岸稲の花　己百
朝ぎをゝ又夏ぎをとれやし　傷耳
ふる雨をたのむ秋のそれも新ら一　一水
河の菜ぎれをちんぐんかうと　白蘋
しぶ栗もそれらりをと衣をつき　蓬布

ぎらてゝ船望をおそんの木　皇襲
三ぐ月をゝ人参氏叶角角　一九
衣川角や一言ぬ一此事を　一茶
ら社一ぞ五丁ぎれを雲亀　己百
ぎっぎあんこの夜せ所ね　午

馬上四韻

ふるの雨も夜をはぬもや　芳兼

一枝　秀枝

かやの風をまちて

旭荘　ゆふやみのおとつれ

秋野

素堂　秋の来ぬ

伯亭　ものぞ又あはれなる

炊玉　おもふ事なき身こそ

一枝　ものをよせたる

楊朝　花のうへよこれ

易　しるの上

杏雨　月ぬ

嵐雪　かけ

未のかぎり

ゆく世のあはれをとゞめ

その作　家々をうつしや

杏雨

[illegible]南やあさ[illegible]の河

或夜

稲妻のよこ[illegible]を見て

秋の夜やかすかに人の膝　一髪

[illegible]こそ一重ふとんも　蕉雪

かさゝぎの[illegible]霜　素丸

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の月みんてらしやも秋かぜよ　雪雨

みつ郎

そのちをやめしそうの月　一朽
ふるてらてけ雨もやしき月　李晨
ひさ人のちやあそひ　宛翠
汁雨とれものとそもふふるあら　鳴歩

ゆきやゆとんうのそう　嬰幼ハ　さ　芳精
くうのそのそうめたりれ　物ゝれ　蕉芝
雲のりやうめぬうさ人のあそ　物餅
大雪やりたのひさひ　一朽
汁のらうそりそうやれ雪北雪の　雪雨
如意輪ハ人のひ
つ松をうう

ねらんうてゆきれ雪北雪の　一朽
終の路れかれ　物餅

新かく場ちやつて
おち焼やきそうじ銀ぢの都白　幸農
　かををまつてうんのんを思ちやりて
招ぢもきやく間のおそうる　前　松
じやうや月よ西ひしやうじをさして　炊玉
一きん腐ふくきえんよ林りんよ　前　松

春うら訴

山伏もいそがしそうに木行ふ　蕪堂
ふるまつさくらさく日のよそほひ　杏雨
枩の根ほれたりひらふ冬の落葉　芳梧
やまみち月おぼろなるの笠ぬぐ　前
山ぎは百里かすむ一村梅の木　公

蕪堂
杏雨
芳梧
前
公

歌仙

もうしたまふうよ　うたてし　祭
　森記のやうものあり法てさも　雨
ぐらしさ弁さ　うちあくる戸の　槽　花
徴書記うまもて去こたあるよ　槽　雪
　そのかんのつこ唐めさ　祭
こと月そ酔をしてもめる　雨
私凡さむくなてあるる春　花

越君の衣かえ　桜
　おかちやくこの様のさひ　雪
汗みと昭そ宵さしめて　祭
　ままきつさ験あがう　雨
夜つきみをまれ餅をつくこの　雪
上下ゆるれやの梅さん　祭

元禄て
十二の
まねく

連

記季

人

尾張部

世を旅ふ
雨九
人の
涼しさや
元禄七庚の
あつ田植人

雨を男よもやもれ傘　赤也
久をあ――って

あの仙や白な陰よ　北也
おも――みのわれ和あ久――さ――先て
は更みをつうもも

鼻ち脆もなくてみまも打る　露川
小もちみそめ之れ立ち――この心　芭

抱月亭

亭人よりてそうん芭を　芭
酒のそ――芭てれ鞭れ杜梅　抱月
をを月をよれむうん抱月亭のをんち
なの――いまとすも軒――てけすミれ路方
ありるにお更も――てけすミれ路方
あやさあうつうに芭とアされ――れ杜国しれる
ひりて下在もさうみおろい行る杜て

朝うれ芭さん杜国　杜国
宝戸行――さやさをを鞭みて御方をんれ
とうつうをの之月れれの初くちをさもを――
杜梅の風流も芭のつい成をのよはさと
まつうに芭二社の一夏をうう

題　二句

詣松岡ヶ祀ゐ

すゝむや馬上よ水ゐ乳ゐ

椎吉

ごを焼くゝ多鼓ゐ

つゝ痛を

見ゐ

痛ゐ乳ゐつけて姫ゐ

亀松岡

きれてそ多ひゝきやそれのゐ

まるとんゝよゝ

村

時ゐ新ゐ

きりれを二人椎ゐ

江のゝ

訪人ゐ

二人見ゐを

う

巴水
九沙
斧林
黎泉
雪川

松醒
山山
山石
抱月
お山 お鼠
杜旭
扉角
素仙

物うきをはらみつゝめ　龍潭
かゝるもみ村ちとよる小なみ　直令

宝のゆれをうるさて

瑞士の明やうもれ桃の毫　素洲
大もえて四みくたり初ろえ　菊潭
つんうを一ヵ筆もれやたうえ　令
指つれ葉ふら初ふ　検石
走えてひこうのえ　（なし）隨政

つくらやうもみを指のうう　不流
うきれうれきいも孤高　（なし）楊仙
枝ふみうてつ胡てふ　哀次
がやつきてのの雨の星み球ふ　検石
一そんを麦あらむ音月花　（なし）秀水
すうあや苞（ヲト）毛ふ菊　左次

露川
松醒
李邑
旭施
左次
素堤

嵐雪
巴人
全
杉風
千那
和泉
松芳

行きた沿のう　　柳伯

詞遊橋

麦みれはてもう　　舟

ものをつくみる　　空

秋

秋うや弁の　　素洗

羊稲の稲和　　梨

稲まくくむ　　九次

種蒔の役　　春

さう雨に箕　　青川

くとくおや　　空

う海さりの　　如山

打草や頭　　素洗

まくく　　青水

うきてあ　　杜明

冬

たゞ
梅仏
山山
猿丸
七番
卜志

一旅まろうどやみそかより

不流

食くふてくれをかしき火燵哉

素硯

雪ながらこゝろもとなき相のまち

仝

風の声きくもさびしき月

巴よ

二夜

一狐

幸駄天りうとやそこらの気象

露川

我買うさしき雪の道

耕作するをとゝしとする神あり

一三二 信濃海邑 川

雨なき日雨ごうこさもおやとう 秋

雨の降るを待かきつけみきり 翁

姉婦のもちにくるしむ鍋乃皃 川

蘭を刈あまし門出するを 秋

切まとあるこゝち人呼出すの 翁

ふる袋のまれあさ月 川

ふるさとをおこすの打日祝ふけ 秋

秋かるゝ野乃雲 翁

咲ふり二株んさ無皃人 川

まふりいさゝけ畑 秋

ふ氣味の胴物をこんかして 支考

新の月雨を中ぬ 北枝

月あるも物うきふしの除 巴水

かもりの神乃氣を清め 川

三鈷の金仏ゐし秘の扉　沈
作をとゝめし門みさを　考
秋蕪をまとふ笠もゆし　次
ほ都のあれみまくしを悼　ま
ねをすいちこれやふれみのり　川
七堂も自慢せ先日立ぬ　帆
金剛の一世ぬ時のこと　考
作しは其の祖ゝまゝ乱　次

春如何とのやうに白梁　ま
三伝つけて馬の鈴も　川
それくみ雪も余をふ　沈
ふるれ先ゝ娘ゝまよ　考
雨ゝ明ゝ百年もうる秋の色　次
ゑもみちふ　柳乃杜葉　玉

元禄七年二月
二十六日より
享保九年かのとの巳迄
通宝四十三人

伊東郡

奉納　二匁

何のまれなる
禍なき中に

おらしもかん
あみうしまち寺を法して
林かそや里うもうられ涅槃像
美祝山
山ふのうめりさつしく解ちく
二条あ
蓑柱門をむらくれてのぞよく
宇栄院
門みの月をそてみ芭よのよみ

梅通
夏木陰れ行く
逢龍寺舎
物うきを生そうよ女性のあ
胡来立一
梅の木みかん紙やうの木梅の京
そをその父弘
山ふの風ふみあるゆへ

さみだれや　　　

折ふし人の語るをきゝかゝれ　折ふし
ばなどゝうちつゞきさゝやかなるいほりの　流水
ありさまなどいとゆかしくて
　　夏かりもとりもあへずたつ
　　七夕ぞらをいそぐなるべし
米澤や夏ふかみどりの朝ぢ哉　路叫
朝風に二日ばかりの名殘哉　名殘
簾うち拂ひてみれば
院くれ空霞なやうなさくら　霞む
　　曙杜

まつをれ雪ありあんとうぐひす　鶯
ふんしやうの草ぬるむ日和哉　芽出
鉢植ゑの花ひらきそむる　信濃
鉢植ゑの日をうくる妹が門　乙由
　　小鮎　二ら
生物や五所ゑびすの魚うな　鰻
早川を左隣ありのちれぬ梅　桂之
　　雪　二ら

友

ほとゝぎす 二句

つゝ〳〵れめるー むかや中郎 乙 芳宋

あともきれ杉のくのよう宝 乙圃

杜若 三句

野ぢ森や業よの下もめるつゝ 許六

もの陽を垂されもう雨かるうる 桐雪

秋

月

月ぞ見ん君も故郷の山の端や　飛鳥井雅有

名月や淀の小舟の通ひ路　加藤暮雨

名月や淀の長堤の人もち　二木

名月や川を挟んで一万戸　一乙

名月や淀の小舟もあの通り　加藤暮雨

名月や淀の小舟の通ひ路　加藤暮雨

名月や淀の小舟もあの通り　加藤暮雨

名月や淀の小舟もあの通り　加藤暮雨

名月や淀の小舟もあの通り

訴田の訴のよそ野のみち　田女
ほ〳〵まてよも急ぬ秋の末　九志
ゲテのそよ動〳〵ひとらるゝ　信篤
虹のかをを切こちふけ――芳みか　新五
くの雲木みそ葉の秀くつれ　翁四　口訣

秋景　三句

秋もやゝ晴まうとする朝ぼらけ　九由
初秋や里わりあてあるさゝ　新五

くつの山

初雪や朝のおもてのおもはれる　一笑

秋景　三句

秋ふかき徒然ほろ〳〵小鳥なれ　支考
雪ちかし――てのそく秋冥　芳舟

十夜

かぜもなく仏のみちびくあさぢかな　ひめ

それ〴〵に二ちをや犬れい　詞竹

わう〳〵と鬼いさましや犬れい　仙之

すゞ二女寺へもやらや犬れい　仙之

宅　三句

松のもと茶こをれめさるゝ　踏之

咄声も落ゝ行ころや　桂之

泊雲の印雪をこぼれる　賀枝

ちる花やの気さむ　芳水

犬雄　二句

うつる〳〵古畑あるく　松雪　一巡

待を隠ゝ人切れみやとなるみ　支考

千鳥　二句

もみぢする秋の山風吹ふけば
おくの窓ふもとの里ぞ夕ぐれ
柳玉
流水

三ノ

煙をも三輪の杉の
煙をもみわの杉の
乙由
旧庵のうらめづらしく
あるじ
掛乞ひ来ては梅の木
掛乞ひ来ては梅の木
圃夕
ものがたりなどしもとしまれ
ものがたりなどしもとしまれ
信鳥

二ノ仙

ちくさをも一ちぎりとや袷うち
圃夕

おく原をれ和舟つんみれり
片雲(サル)の卵書とのとぢつづく
乙由
木間

一吹あらしうちも堅むる雨
乙由
あま門の旦那を迎ふれ秋の月
なな
今朝あうつきされ霜をおかゆる
なな

六河の掃除うをぬ砂うと 秀
いつもおー川端同
をてをれそうをちをやうれ油う由
行のよ砂おー行憂む
砂事も事文をれを事ねみ本
十ら事れ猿をーてまる秀
すよみうる踊うおれ事みーう同
多猫をさうれ秋の味よ由

事和み中うれ湯ら行京畑女
朴の彦をあのこう月み歌友
今しのうれ花をそびう古法服秀
和雪みわうーを降同
朝を風み川のちしの峰う由
生郷の彦ほみ延う来もれ秀
をもうをひーうんうその重友
二五ちをを起てたこえや女

今年も孫子等の多
青十二百首許
おのく記す
連歌十九人